

発行日：2023年1月17日

岡崎がくどうの会だより

題字：自由王照平

第40号



発行：NPO 法人岡崎がくどうの会

【TEL&FAX】0564-32-0325

【E-Mail】okazakigakudou@yahoo.co.jp

2022年10月29日（土）から30日（日）の2日間にわたって、第57回全国学童保育研究集会在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインで開催されました。今回は、感想を含めたレポートを一部ではありますが、紹介します。

他の指導員のレポートは、ホームページ(<https://okazakigakudou.jimdofree.com>)に掲載されていますので、お時間のある時にお目通しください。

【寛 由衣さん（あおぞらクラブ 常勤専任指導員）】

分科会⑱ 『子どもの気持ちに気づく～家庭で、学童保育で～』

最初は子どもの気持ちを考えるんだから、子どもの話を中心に講義が進んでいくんだろうなと思っていました。

“しかし”なのか“だからこそ”なのか、ちょっとよくわかりませんが...、講師の杉田真衣さんは、『指導員さん現場大変だよ』『私（杉田）がこんなところでこんなこと言わなくても、みんなすでにやってくれてるんだよ』『きっと、わかっててもできないときもあるー！って感じだよ』と、どこか保護者や指導員に寄り添ってくださるあたたかさを感じる講義内容でした。

上記の気持ちを抱えて講義を聞き始めた私にとってどこかふわふわと不思議な感覚がありましたが、聞いていくうちに子どもや子どもの気持ちを真ん中に置くけれど、そのためにはまず大人（保護者や指導員）がそのときの自分の気持ちに気づくことが必要で、大人の心の余裕が必要だからこそ、1つめに保護者が置かれている状況について考え、2つめに学童保育所が置かれている状況について考え、3つめに保護者と指導員という立場は関係なく“大人”について考え、最後に子どもたちの気持ちについて考えていくんだろうなと思いました。

講義の中で印象に残った内容の1つに、『大人がおおらかに語り合える場を』という話がありました。その話の中では、まず大人同士で自分たちが置かれている状況を共有し、お互いに苦労をねぎらっていくことが必要で、子どもたちの言っていることがわからなかったり、子どもの気持ちに気づけているのか自信がないといった疑問や不安を抱えすぎることなく、打ち明けあい、語り合う機会を設けることで、それはめぐりめぐって子どもたちへの声掛けにつながっていくというものがありました。

親だったらわかるはずとか、指導員なら気づくべきといった呪縛のようなものではなく、そういったしがらみが何もないような関係性（保護者とも同僚とも）を大人同士が築いていくことの大切さを教えられた気がします。ですが、この話を聞いて今現在自分の持っている“モノ”でどうしたらそのような関係や場所を作っているのか想像することができず、とても大きな壁が立ちただかのように感じたのも事実です。

2つめに、『大人たちは常に子どもたちから見られていて、私たち大人のあり方や生き方が問われている』という話です。こちらの話は深堀をしていったわけではありませんが、とにかく自分自身の人生において体験したことや経験したこと、その経験や体験によって生まれた自分の考え方などが、のちに子どもたちに対する伝え方だったり、自分の子ども観というものにつながっていくのだろうなと感じました。

杉田さん自身の人生にからめた話や、大学で講師をしたり学生とかかわったりする中での経験談や失敗談を交えていただいたり、性差やマイノリティにからめたりと、テーマに沿いつつもいろいろなお話を楽しく聞くことのできた全国研でした。

【伴 裕佳さん（あそびばクラブ 非常勤指導員）】

分科会⑩ 『今日の子どもの問題を考える』

「子どもの問題を考える」という課題でまず子ども達が成長していく中で子ども達自身の社会形成が大切であるという事を学びました。家庭や学校・学童保育といった大人の保護がある場所だけでなく子ども達の自由な時間・雑談や遊びの中で関係を作っていく事が成長にとって大事なものだと思える事が出来ました。例としてお話し頂いた例えば「しね」という言葉を関係性が分からないまま使ってしまうといった事は日々の保育の現場でもよく目にする事だと思いました。勿論良くない言葉なので大人は注意すべきだと思いますが、相手がどう思うとか自分が言われたらどうだとか、冗談として受け取れあえる相手だとかは子ども達同士の社会やコミュニケーションの中で理解して成長していくんだなと思いました。

インターネットとの関わりについて、最近では特に家に帰ったら YouTube を見る！ゲームがやりたい！といった言葉が多く、楽しみやハマれる事があるのは良いなと思う反面、ゲームやタブレットばかりしているのって大丈夫なのかな？という考えが浮かばないことも無くずっと疑問に思っていたのですが、ゲーム内のオンラインでの会話や動画を見てその事について語り合うなどは自分が子どもの時も同じように過ごしていて、インターネットの普及とともに手段が少しずつ変化しているだけなのだなとも思い、ゲームに限らず依存してしまったり、誤った利用をしない様に大人が把握できれば問題がないのかと思いました。

子ども達がやりたい事とやらなくてはいけない事がある中で、自分の気持ちが言えたり何をするのか・どうしたいかという事を自分で考えようとしていく中で困った事や悩んでいる事に耳を傾けて、支えていければと思います。

【伊藤 博華さん（風の子クラブ 非常勤指導員）】

分科会②-7 『障害のある子どもにとっての学童保育』

丸山先生のお話の中の、「不思議な遊びに付き合ってくれる指導員がいる」「こだわりをわかってくれる人がいる」「この先生なら話してみようか」「考えてくれている指導員がいる」私になりたい指導員像です。

「問題は解決していないけど自分の辛さをわかってくれる」これは、私たち指導員にも子どもにもはまる説ですね。

保育に特効薬があるわけではないけれど、障がいのある子どもだけでなく、すべての子ども達が満足できる様な環境づくり。一人一人に応じた調整が必要で、道理があれば、障がいのある子（通常の子ども）にとっては特別扱いが必要なのだ。

正しい解答はなく、子どもと日々向き合っていくこと、保育とは楽しい修行ですね。

明日会える子ども達の笑顔のために、研修は必要不可欠です。

ありがとうございました。

【遠山 祥子さん（つくしクラブ 非常勤指導員）】

分科会②-1 『子ども理解の視点と安心できる関係づくり』

今年の全国学童保育研究集会でわたしが受けた研修は、カンファレンスのような形でした。

前半は高麗川さくら学童保育室の太刀岡先生の実践の記録で、ADHD 傾向の男の子についてお話を聞くことができました。

障がいを持つ子とそうでない子との関わりは衝突することが多いが、どちらかが我慢すれば良いと言うわけでもない。仲良くしてほしいが、「仲良くしなさい」と綺麗事だけでは済まされない…。お互いの気持ちを理解し、受け止め、うまく関係性が作れるようにサポートしていく。そのためには指導員として何ができるか？研修を受けてわたしも改めて考える事ができました。

「障がいのあるなしに関わらず、子どもでも大人でも人付き合いには苦手な人がいて当たり前」というお話がありました。学童保育所で一緒に生活する中で、いつも揉めている子たち、そんな子たちの苦手な人との付き合い方も上手くサポート出来る指導員になりたいです。

苦手な人とでも、みんなが少しの我慢やゆずり合いの気持ち、思いやりと優しさで繋がっていけたら嬉しいです。

後半はグループに分かれての話し合いになりました。

日頃関わることの出来ない、他県の指導員の先生方のお話を聞くことができました。

どんなことに困っているか？それについてどのような対応があるか？など、いろいろな意見を聞くことが出来、とても参考になりました。

今回の研修で学んだ事を日々の保育に役立てて行きたいと思います。

【宮本 喜代枝さん（なかよしクラブ 非常勤指導員）】

分科会①-3 『学童保育指導員の仕事ってなあに？』

子どもたちにとって安心できる放課後の居場所が学童保育です。学童保育の役割は、働く親の願いである。保育園を卒園後、留守家庭に帰る心配を取り除く事、子育てをしっかりとしながら安心して働ける事、我が子の放課後を安全に元気に充実して過ごしてほしいという強い願い。学童保育への期待は大きいと改めて感じました。

学童保育は異年齢の子どもたちが生活する場で、子どもは1人ひとり発達や個性も違い、失敗や過ちを繰り返しながら成長・発達をしていく過程にある子どもたちです。中には上手に表現できない子は、言葉で伝えられず行動で示すこともあり、特に一年生などは理解できず行動してしまうので、年齢に応じて指導員が言葉を考え伝える必要があると考えます。日々の保育の中で、子ども1人ひとりの変化や気づきを指導員で話し合うこと、課題を探って意見を言い合うことの必要性を感じました。

指導員も間違えることもあるし人それぞれ気づきも違うので、話し合うことで自分も成長していきたいです。指導員間のチームワークはとても重要だと改めて認識することができました。

【杉田 眞弓さん（あおぞらクラブ 非常勤指導員）】

分科会①-3 『学童保育指導員の仕事ってなあに？』

子どもをめぐる現状に、貧困、教育格差、生活様式や価値観の多様化、少子化、共働き家庭の増加などがあげられていました。

貧困による虐待増加、少子化で子どもの人数が減っているにもかかわらず、虐待は増加していることに心が痛くなりました。心理的虐待が増えている。その結果、自己肯定感の低下につながってしまう。

共働きが増えたことにより、地域子育て支援＝学童保育の必要性が求められている。様々な課題も見えてきて、学童保育は放課後の生活の重要性が求められている。「子どもの健全なかかわりの中で、いろいろなことを学び、成長できるように育成支援を行うこと。失敗や過ちを繰り返しながら成長・発達していく過程にある子どもたちであるから、それを温かく見守っていく必要がある。」

そんな中、私に何ができるのか？何もない？とんでもないところへ入ってしまったのか？でも、いろんな人がいて、いろんな考え、気づきはみんな違うということ。だからチームワークが大切で、複眼で見る→多くの指導員で話し合うことが大切なことだと言われて、私にもいる価値があるのか…私も自己肯定感が低いかも。

学童保育が、子どもたちが行かないといけい場所ではなくて、行きたい場所になるように、少しでも力になれるといいなあと思いました。その一員になれるように努力していきたいと思いました。

【米本 美紀さん（たけのこクラブ 常勤専任指導員）】

分科会②-5 『高学年にとっての学童保育』

今回この分科会を選んだ理由として、高学年の子どもにとって居心地のいい居場所にしてほしいと思い、他の学童保育では高学年に対してどんな配慮があるのだろうと思いこの分科会を選びました。

分科会では、特に講師がいてお話を聞くという感じではなく、実践報告から質疑応答に入り、高学年の生活スタイルや反抗的な高学年に対しての声掛けだっりの意見交換のグループワークでした。事前に発表者も決まっていた、進行役も一番指導員歴の長い方とされていたので、トークルームに入ってからでも沈黙という無駄な時間もなく、スムーズに入れたので沢山の交流ができ、とても充実した時間でした。

どうしても、高学年と低学年では手の掛かり方も違うため関わりが減ってしまっている中で、指導員との関わりを拒否したり、暴言を吐くなど何を思って学童保育にきているのだろう？学童保育って高学年にとって楽しい場所なのか？という交流の時間になりました。高学年って難しいという指導員はいい意味でも全員同意見でした。

男性指導員は、思春期の女の子との関わり方、声掛けに戸惑う場面もある。また、女性指導員も同じで男の子との会話のキャッチボールが出来ず悩みどう関わっていいのかわからない時もあるという意見がでました。特に新人指導員とは会話すらしてもらえない事や存在すら認めてもらえないと悩む指導員の方もいました。

低学年の時はグイグイと関わり高学年になるにつれ、さみしいですが程よい距離感を保ってあげることも大切だと思いました。

言葉はなくてもただ隣に来てくれる高学年もいます。言葉数は少なくなっても、それでも学童保育に帰ってきてくれる高学年、居てくれるだけ十分、帰ってきてくれるだけで十分、隣に黙って座ってくれるだけでも十分。でも、忘れてはいけないのは、高学年はどういう思いで来所してくれるのか？また、どういう居場所になっているのか？これだけは常に考え、高学年も楽しく、居心地のよい場所にするために考えなければいけないと改めて感じることできた分科会となりました。

【岩井 里真さん（たけのこクラブ 常勤専任指導員）】

分科会②-3 『学童保育の生活とあそび』

午前のレポート発表では、福島県福島市にある“清明っ子クラブ”の子ども達のあそびについてレポート発表をしていただきました。午後からはグループワークで4つのテーマについて話し合いをしました。テーマはテーマ①「異年齢同士があそびやすい学童ルール」、テーマ②「あそびで大切にしていること」、テーマ③「子ども同士をつなげる指導員の関わり」、テーマ④「やることなくつまらないという子に対して」でした。一日を通して、子どもの人数や施設の大きさ、周りの環境等様々な規模の学童保育や指導員の年数の違いから同じあそびでも、多種多様なあそび方や学童保育の暮らしの在り方があることを知ることができました。

特に、テーマ①の「学童ルール」についての話し合いは、私にとって難しく感じました。大規模クラブでは様々なあそびのルールがあり、異学年が一緒に楽しく遊べるよう工夫されていることが多くあり、小規模クラブでは逆にルールはあるもののその都度あそびに参加する子どもの年齢や人数に合わせてルールが変わることが多く、なかなかこれといった「学童ルール」が見当たりませんでした。もしくは、その「学童ルール」が日常の当たり前になりすぎていて「学童ルール」と私自身が気付いていないのかもしれませんが難しいテーマだったと感じました。そして、最後に『子ども達にとってあそびは生活の中心である』というキーワードに深く考えさせられました。私自身仕事として子ども達と遊んでいたり、あそびを提供していましたが、子ども達にとってあそぶことそのものが生活の一部であり、『あそび』ということが生活から切り離されていないので友達や指導員と話すこともあそびの一部なのだを知り、子ども達とのかかわり方を改めて考える良い時間となりました。

【鈴木 美幸さん（風の子クラブ 常勤専任指導員）】

分科会⑩ 『安心して関係を築ける人数にー「40人以下」の実現を考えるー』

分科会では、各学童保育所の悩み等を話す場であったが、その中でも衝撃的だった言葉がいくつかあり、※行政が学童保育所の現状をあまり把握できておらず、学童保育所が乱立し、子どもの取り合いになっている

※社会福祉事業団が運営しているため、原則3年で配属先が変わる

※第三者評価制度を取り入れている

※指定管理者制度での学童保育所の為、3～5年で撤退の可能性もある（子どもたちの居場所はどうなるんだ・・・？）

※行政から家賃補助が全くない地域、補助はあるがかなり安い

※放課後子ども教室と学童保育を併行し、放課後子ども教室の補助金を学童保育所の備品（おもちゃ等）に使わせてもらっている（このような形で補助金を使っているのだろうか・・・）

※大規模運営だと子どもや指導員が、子どもの顔と名前が覚えられない（半年以上たっても、いまだに覚えられないらしい）

後半はおやつについての議論になったが、児童館の中に学童保育所があるため、児童館を利用する子どもたちがかわいそうだから、学童保育所を利用している子どもたちのおやつが禁止となった事例もあり、この分科会に参加されていた指導員さん方が、行政に何かしらの不満を持ち、現状を変えていかなければならないとの思いを持ちながら日々、保育に従事していることが理解できた。そして他県の学童保育所の現状を聞き、岡崎市は学童保育所に対かなり理解があるということも同時に理解できた。

大規模運営というと、狭い保育施設で多人数が生活するというイメージがあるが、大きな施設で少人数の子どもたちが、のびのびと生活をしているというイメージに今後転換されていくといいなと感じた。そのためには、高校、短大、大学等で支援員の資格取得ができるようなカリキュラムがあったり、職業の選択肢に「放課後児童支援員」が入ったりして指導員の数を増やしていくことや、待機児童が多い地域には、行政等が積極的に学童保育所の設置をしていかなければならないと痛感した。では、我々にできることは何？と問われると、私にできることは、今日の前にいる子どもたちが将来、指導員として帰ってきてくれるような保育をし続けていくことではないだろうかと思った。

～編集者からひとこと～

今回の全国学童保育研究集会でも、多くの指導員がさまざまな分科会に参加して、たくさんの学びと、気づきを得ることができました。

現場で子どもたちと生活する指導員として、ともに生活する子どもたちのためになにができるのかをあらためて問い直しながら、学んだことを日々の保育に生かしていけるように指導員一同、努めていきたいと思ひます。